

# 扁額の意匠と構造

—平城宮第一次大極殿正殿

扁額の復原考察—

## 1 はじめに

本稿は古代から中世にかけて作られた扁額を概観し、大極殿の扁額の復原案を考察するものである。大極殿の扁額の復原研究に中世の扁額を含めた理由は、古代の扁額の現存例が少ないと、扁額の構造や意匠の新しい要素を知ることで古い要素を見出すためである。

“扁額”の意味を日本国語大辞典で調べると「室内や門戸にかかる横に長い額」とある。“扁”に「よこがく」という意味があることからそう意味づけられているようである。しかし“扁”は“戸”と“冊”的会意文字で木の札を門戸にかけることを意味しており、額が縦長か横長かを示すものではない。

扁額の用途は、扁額がかけられている建物の名称や、その建物を含む施設全体の名称を標示するためのものである。日本の扁額は寺院の額字にはじまり、朝廷から正式に認められた寺院には勅額が与えられた。こうした寺院は“定額寺”と呼ばれ、續日本紀天平勝宝元年(749)7月乙巳(13日)条に初見される。元興寺と大安寺の東西南北の各門にはその寺の四つの名称が書かれた扁額がかけられていたという(帖子本聖徳太子伝私記、七大寺巡礼私記)。扁額の源流については、中田勇次郎氏の研究<sup>1)</sup>に詳しく述べられているので割愛する。

## 2 扁額の構造と意匠における注目点

表1は現存する縦長の扁額の仕様を整理したものである。縦長の扁額のみを扱う理由は、横長の扁額は鎌倉時代以降に現れ始めるもので、本稿の目的である大極殿扁額の復原対象である古代の扁額とは異質のものであると判断したからである。

表1を作成するにあたって、扁額を種別するための項目をいくつか設定した。種別項目のうち重要だと思われるものは次の3点である(図1)。

1. 扁額の額縁が額面とほぼ平行に取り付いているか、または起きているか。
2. 左右の額縁下方にみられる脚状の突出部(以下、脚)の有無。

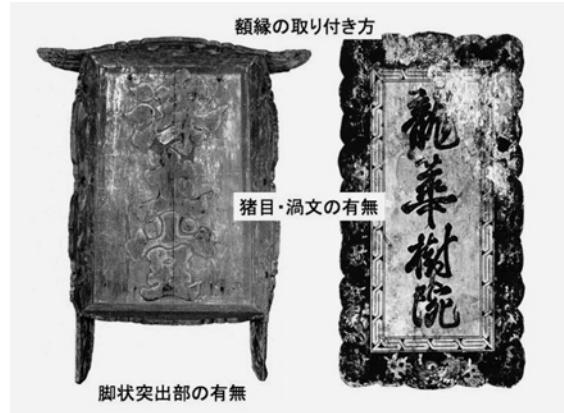


図1 扁額の構造と意匠における注目点  
左: 浄土寺淨土堂扁額、小野市教育委員会『小野の文化財』1996  
右: 龍華樹院扁額、東京国立博物館所蔵

## 3. 猪目や渦文の有無。

1と2は相互の関連性に注目し、3は額縁の形状や額縁表面の意匠に関連しており、その変遷に注目した。以上3点に寸法、彩色なども関連づけて各時代の扁額の特徴を概観する。

## 3 扁額の変遷

扁額の部位ごとにその変遷をまとめた。

### 額面(文字の仕上げ)

奈良時代…彫刻(文字周囲を薙研彫り)。

平安時代…墨書き、彫刻。

鎌倉時代…彫刻(陰刻)、墨書きほか。

南北朝・室町…銅板釘止め、彫刻金箔押し。

### 内枠

奈良時代…痕跡あり(現存しない)。

平安時代…内枠を作らず彩色で表現するもの

(雷文つなぎ)。

鎌倉時代…太い内枠を1本廻すもの多数(雷文つなぎ)。

連珠文(浮彫り)。

内枠を作らず彩色で表現するもの

(雷文つなぎ)。

南北朝・室町…二重に内枠を廻らせ内枠間の幅を広く

取る(浮彫り、銅板)。

珠文(飾鉢、彩色)。

### 額縁

奈良時代…平面(額面と一体か?)。

平安時代…平面、起きているものの両方あり。

猪目をもつものがみられる。

鎌倉時代…平面が多く、猪目をもつ。

額面と一本で作るものもある。

南北朝・室町…起きたものが多く、室町後期から猪目にかわり渦巻文様がみられるようになる。  
表面に彫刻を施すものもみられる。

#### 彩色

奈良時代…不明（東大寺西大門勅額に漆塗の可能性）。  
平安時代…蓮弁の縹緲彩色、竜、宝相華。  
鎌倉時代…蓮華文の縹緲彩色・切金、牡丹唐草文、漆塗り。  
南北朝・室町…額面・額縁ともに黒色。

#### 4 額縁の意匠と構造

大極殿の扁額について考察する前に、時代性がよく表れ、意匠と構造の両方に意味を持つ額縁について整理しておく。

**構造** 表1をみると、脚の付いているものは教王護国寺の扁額以外は比較的大きな扁額に限られていることがわかる。その多くは鳥居や楼門といった高所に掲げられていたものである。大きな扁額に脚が必要になる理由は、扁額の支持構造と関係しているように思われる。小さい扁額は、額面または額縁の裏に吊金具を取り付けて建物の長押や頭貫に懸けるだけでよいが、大きな扁額の場合支持方法を吊金具のみに頼ることは躊躇される。最も簡単で確実な支持方法は、扁額の底辺を長押や頭貫等の横架材の上面に据えて上部を吊金具で引き付ける方法であろう。脚を付ければ額面にかかる構造的負担を軽減することができ、脚の長さを調整することで額面を具合の良い高さに収められる利点もある。額縁が起きていれば扁額自体が箱状をなすことから構造的にさらに有利である。実際、脚のついている扁額は東大寺西大門勅額を除いてすべて額縁が起きていることから構造的な配慮によるものと考えてよさそうである。

**意匠** 額縁の意匠として花先形の繰形がよく用いられる。鎌倉時代までは花先形と、その外形線に沿う形をした猪目を穿つものが多い。南北朝に入ると、猪目の代わりに渦巻文様（蕨手文）が施されているものがみられるようになる。渦巻文様は花先形の意匠の抽象化が進み発生したものと考えられ、花先形繰形の外形線を構成する意味で猪目と意匠的な役割は同じである。したがって、その二つが併存することはほとんどない。花先形の配置は2種類あり、額縁の縦方向の花先形の数を増やすもの

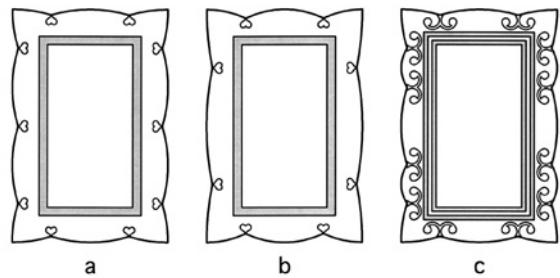


図2 扁額額縁模式図

（図2a）と、花先形の幅を広げるものの（図2b）がある。

南北朝時代に入ても花先形の形状は鎌倉時代のものと基本的には同じであるが、配置については新しい手法がみられた。それは縦方向の花先形を伸ばして変形させるかわりに花先形と花先形の間に別の繰形を配置する手法である（図2c）。この手法を用いれば花先形の数に制限されることなく扁額の縦横比を設定することが可能で、隅の花先形のゆがみもなくなる。一方で額縁の外縁の形状が複雑化し、繰形の形状の意味が一目では捉えにくくなるというデメリットもある。

#### 5 大極殿の扁額復原

奈良時代の大極殿扁額に関する史料はない。平城宮第一次大極殿正殿の扁額復原に参考になると思われる古代の扁額の現存例は数えるほどしかない。奈良時代以前のものでは、東大寺西大門勅額と唐招提寺勅額、製作年代は不明ながら古風な意匠と風風食著しい額面の状態から奈良時代を降ることはないと思われる旧法隆寺東院南門のものと伝えられる不明門扁額の3面である。しかし、残念ながらそれらは完形を留めていない。平安時代の扁額も数面あるだけで、奈良時代のものも含めていずれも寺院、神社の扁額ばかりである。

宮殿建築の扁額に京都御所の紫宸殿と承明門の扁額があるが、いずれも江戸時代後期に作られたものである。ただし、年中行事絵巻<sup>2)</sup>に描かれている扁額をみると同様の形状をしており古式を留めているようである。

ここでは具体的な復原案の提示は避け、大極殿の扁額に適当と思われるいくつかの特徴をあげるにとどめておく。

**扁額の設置位置** 「七大寺巡礼私記」に元興寺金堂の南面上層に「弥勒殿」と書かれた扁額がかけられていたことが記されている<sup>3)</sup>。平城宮第一次大極殿正殿においても南面上層中央に扁額を設置するのが適当だと思われる。

**扁額の大きさ** 大極殿の上層は高欄が廻り、偶数間であ

ることからその中央は壁面から組物や尾垂木が飛び出すなど扁額の大きさを制限する諸条件がいくつある。それらの条件下で設置することのできる扁額の最大寸法を図面で検討した結果、その高さは現在朱雀門にかけられている扁額と同じ(=2659mm)であった(図3)。

大極殿の扁額の大きさが朱雀門のものに比べて小さいということは建物の規模からみて考えにくい。したがって、大極殿の復原扁額の大きさは現朱雀門扁額とほぼ同じとすることが適當であろう。

**額縁縁形の形状** 平安時代以降にみられる簡単な花先形の縁形は奈良時代の2面の扁額にはみられない。奈良時代の額縁には彩色が残されていないため額縁の形状が何をかたどったものか判断することは難しいが、具象的な花先形や唐草であったと思われる。大極殿復原扁額の額縁がこれに倣うならば、時代は異なるが庵我神社の額縁の意匠が参考になるかもしれない(図4)。

東大寺西大門勅額の額縁は江戸時代の後補である。その額縁に留められている八天像は鎌倉時代にそれ以前からあったものに倣って全て作り直されていることが奥健夫氏によって指摘されている<sup>4)</sup>。それは奈良時代当初から八天像があったことを示すものであり、額縁も八天像と同様に当初に倣って作りなおされた可能性が考えられ

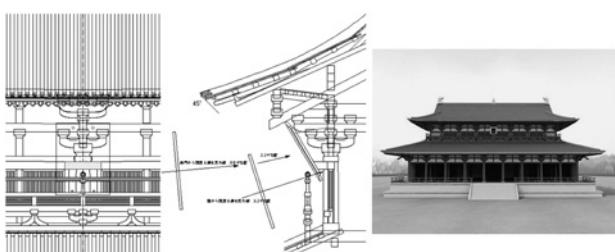


図3 平城宮第一次大極殿扁額設置検討図



図4 唐招提寺勅額・不明門勅額・庵我神社扁額  
(同一スケール、不明門勅額は東京国立博物館所蔵)

る。今回東大寺西大門勅額の木割を調べた結果、額縁・額面・八天像が全て天平尺の7寸5分を単位寸法として設計されている可能性を見出すことができた(図5)。現在の額縁の意匠は雲形もしくは花先形をかたどったものといわれているが、縁形の中央が突出していることから花先形の縁形と考えられる。東大寺西大門勅額の額縁が当初の形状を踏襲しているとすれば花先形であってもおかしくはない。

**額縁の構造** まず東大寺の扁額が後世に見られる大型の扁額と同じ特徴(左右の額縁に脚が付き、上辺の額縁が左右に突出している)を持ちながらも額縁が起きていない点に注意したい。前述したとおり、現在の扁額が当初の形状を踏襲している可能性があり、もしそうであるならば当初の額縁は平面だったということになる。しかし、東大寺西大門勅額には八天王像が付属する特殊なもので、そのために平面状としたことも考えられる。この点に関しては、いずれか一方を選択することは難しい。

ところで、唐招提寺と法隆寺東院南門の扁額は脚をもたないが、東大寺西大門勅額の額縁が当初の姿を伝えていれば、奈良時代の扁額に脚があつてもよいことになる。

大極殿の扁額の設置方法について検討した結果、脚をつけた場合、それをのせる横架材が建物にないため、脚の有無が設置方法に影響しないことが判った。そのため

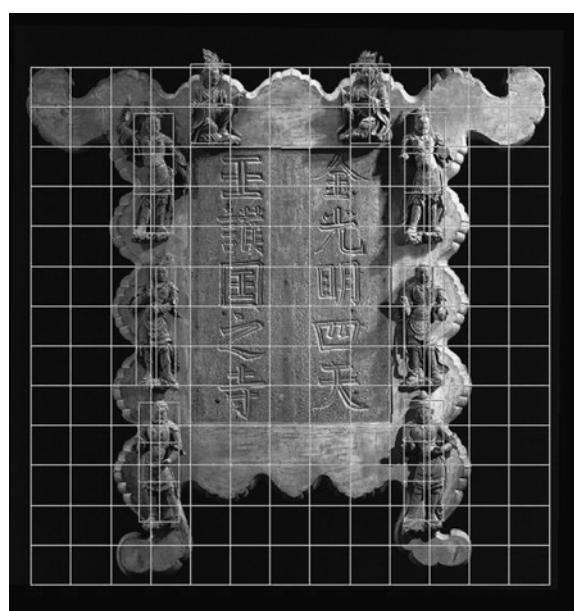


図5 東大寺西大門勅額  
(奈良国立博物館『東大寺のすべて』2002による、グリッドは222.75mm)

脚の有無についてはどちらを選択することもできるが、高所に掲げられた扁額に脚の付いたものがよくみられることから脚を付けたほうが良いように思われる。

つぎに、額縁上辺左右の突出部の有無について考えたい。現存例をみると、額縁上辺左右の突出部をもつ扁額には必ず脚がある。このため、大極殿復原扁額に脚をつける前提で記述をすすめる。平安時代の扁額で脚の付いている教王護国寺と高野神社の扁額には額縁上辺左右の突出部はみられない。東大寺西大門勅額を除けば、浄土寺淨土堂の扁額に初めてみられるものであるが、この扁額は浄土寺造営の際に東大寺から移したことが伝えられるだけで製作年代はよくわからない。北宋の建築技術体系をまとめた『營造法式』<sup>5)</sup>に扁額(牌)の設計方法が記されており、同様の形状が図示されている。このような形状は平安末から鎌倉時代に伝えられたものかもしれない。しかし、東大寺西大門勅額の額縁が当初の形を踏襲している可能性があるため、いずれも決め手を欠く。

**扁額の文字** 平城宮の殿舎や諸門の扁額に関する直接的な史料は知られていないが、大極殿については平安宮の大極殿の扁額が参考になる。平安宮の大極殿の扁額は、第二期の大極殿(879~1058)の扁額を藤原敏行、第三期の大極殿(1071~1177)の扁額を源兼行(後に藤原忠通のものに掛け替え)が書いたことが知られている。扁額の文字を直接伝える史料はないが、空海が筆者に擬せられている第一期の大極殿(794~876)の扁額については、草書による筆勢が余って「火極殿」としか読めないと非難されたとの逸話があり(『太平記』巻十二、『源平盛衰記』巻四)、平安宮の大極殿の扁額の文字が「大極殿」であり、しかも草書に相応しい縦型の扁額であった可能性が高いことがわかる。

ところで、8世紀初頭の年号「大宝」が実例では「太宝」と書かれる場合が多いなど、「大」と「太」は通用する。したがって、平城宮第一次大極殿の扁額が「太極殿」であった可能性も否定はできないが、積極的に「太」であったことを示す史料はなく、また、中国の「太極殿」(北極星という唯一無二の存在に由来)との区別からも、扁額の文字は「大極殿」と考えるのが穩当であろう。

扁額の文字の復原には、当時の書風に似せて書き起こす方法のほか、当時の文字によって集字する方法が考えられる。8世紀の文字として集字に用いられる代表的な



図6 詩序・和銅経より集字した「大」「極」「殿」  
左:詩序(奈良国立博物館『平成6年正倉院展』)  
右:和銅経(滋賀県常明寺蔵 大般若経第24、奈良国立博物館『奈良朝写経』1983)

作品に『聖武天皇宸翰雜集』があるが、これは天平3年(731)の年紀をもち、710年代前半に建設された第一次大極殿の扁額の文字としては相応しくない。

同時代の作品としては、慶雲4年(707)の奥書のある『詩序』(正倉院に伝來した初唐の詩人王勃の詩文集)と、和銅5年(712)の奥書をもついわゆる和銅経(長屋王願経)とがある。前者は多数の「大」「極」「殿」を含み、選択肢に事欠かないが、扁額の文字としては行書風の闊達な書体に過ぎる感がなきにしもあらずである。これに対し、和銅経の奥書は端正な楷書で書かれ、しかも「大」「極」「殿」の三文字を奥書の中の近接した部分で揃えられるという利点があり、筆勢の点でも申し分ない。また、年代的にも第一次大極殿建設中の時期のもので、第一次大極殿の扁額の文字として、より相応しいと考える。

試みに両者の一例を図示する(図6)。

(山下秀樹／奈良県・窪寺茂・清水重敦・渡辺晃宏)

## 註

- 1) 中田勇次郎『扁額』世界聖典刊行協会、1981。
- 2) 小松茂美・吉田光邦『日本絵巻大成8 年中行事絵巻』中央公論社、1977。
- 3) 藤田經世『校刊美術史料 寺院篇上巻』中央公論美術出版、1972。
- 4) 奥健夫「東大寺西大門勅額付属の八天王像について」『南北佛教』81、東大寺図書館、2002。
- 5) 竹島卓一『營造法式の研究 二』中央公論美術出版、1971。

表1 扁額仕様一覧

	所有者	所在地	制作年代	西暦	額縁	脚	猪目	渦文	設置建物	全体高	全体幅	文字仕上げ	額縁仕上げ	額縁の形状	額縁構造	彩色文様
奈良以前	法隆寺	奈良	推古朝?		平	-	-	-	伝 東院南門	106.0	84.8	不明	不明	唐草?	額面と一体か	不明
奈良時代	東大寺	奈良	天平勝宝2?	750	平△	○	-	-	西大門	286.4	289.7	葉研影	不明	雲脚、雲形、平		不明
	唐招提寺	奈良	天平宝字3年以降	759-	平	-	-	-	講堂or中門?	148.0	117.0	葉研影		雲?	額面と一体か	不明
平安時代	救王護国寺	京都	平安初期		起	○	-	-	八幡宮	40.9	23.0	墨書	繪縁	雲脚仰蓮花先形、三方、起	雷文つなぎ	
	海竜王寺	奈良	鎌倉時代初期以前	-1292	平	-	△	-		95.0	62.2	葉研影	黒漆地彩色	花先形、全周、平	ヒノキ	
	秋篠寺	奈良	9c	850	平	-	△	-	香水閣	45.5	24.2	未確認		花先形、全周、平		
	興福寺	奈良	寛仁元年	1017	平	-	○	-		77.8	41.8	墨書	朱、緑青、胡粉	蓮弁、全周、平	額面と一体か	宝相華、龍、雷文つなぎ
	高野神社	岡山	寛弘6年?	1009	平	○	-	○		75.7	60.6	銅板		脚付き花先形渦文、全周、平		
	大藏寺	奈良	保延6年	1140	?	?	?	?		85.0	28.5	彫刻		雲形か		
	金剛福寺	高知			?	?	?	?				彫刻(陰)				
	淨土寺	兵庫	鎌倉初期以前か?	-1192	起	○	○	-	浄土堂	160.0	120.0	墨書?		花先形雲脚、全周、起		唐草模様
鎌倉時代	海住山寺	京都	鎌倉	1208	起	-	○	○		72.5	52.0	彫刻、白土		花先形、全周、平		彩色有り
	海住山寺	京都	鎌倉		平	-	○	-		62.4	42.0	墨書		花先形、全周、平		蓮華文、切金縁取、雷文
	石龕寺	兵庫	鎌倉(仁治3年頃)	1242?	平	-	○	-		102.5	65.0	未確認		花先形、全周、平		宝相華浮彫、雷文つなぎ
	大興寺	香川	文永4年	1267	平	-	○	-		76.3	45.4	彫刻(陽刻)		花先形、全周、平		
	長福寺	京都	文永7年	1270	平	-	○	-				墨書	繪縁彩色	花先形、全周、平		雷文つなぎ
	西蓮寺	奈良	文永10年	1273	平	-	○	-		71.0	48.0	金箔(後補)	不明	花先形、全周、平	額面と一体	
	伊奈富神社	三重	文永11年	1274	平	-	○	-	社殿	77.3	52.1	彫刻(陰)、金箔	漆	花先唐草形、全周、平	額面と一体	
	伊奈富神社	三重	文永11年	1274	平	-	○	-	社殿	77.0	53.9	彫刻(陰)、金箔	漆	花先唐草形、全周、平	額面と一体	
	伊奈富神社	三重	文永11年	1274	平	-	○	-	社殿	77.3	53.0	彫刻(陰)、金箔	漆	花先唐草形、全周、平	額面と一体	
	(谷保)天満宮	東京	建治元年	1275	起	-	○	-		68.2	50.0	彫刻(陰)		蓮弁、全周、起		
	中宮寺	奈良	13c後期	1280	平	-	△	-		98.0	68.0	墨書	朱、緑青、繪縁	蓮弁、全周、平	上下右は一体	花弁、連珠文
	如意寺	京都	永仁3年	1295	平	-	○	-		65.4	40.0	彫刻(陰)	漆	花先形、全周、平	額面と一体	
	知立神社	愛知	正安3年	1301	起	-	△	-		73.0	44.5	彫刻(陰)		花先形、起		
	猿投神社	愛知	嘉元2年	1304	平	-	○	-		87.9	44.0	墨書		花先唐草形、全周、平	額面と一体	牡丹唐草、雷文つなぎ
	瀬戸神社	神奈川	延慶4年	1311	起	-	-	-				彫刻	赤色	花先形、全周、起		
	魔我神社	京都	元亨3年	1323	平	-	○	-		82.2	49.0	彫刻(陰)、後補墨		蓮華桜花先形模様	額面と一体	
	四天王寺	大阪	嘉曆元年	1326	起	○	-	-	石鳥居	156.1	121.2	銅板、釘止め		花先形、三方、起	錫銅製	なし
	平勝寺	愛知	元徳2年	1330	?	?	?	?		50.5	27.0	葉研影	不明	不明	不明	不明
	大山祇神社	愛媛	鎌倉		起	○	△	-		126.0	81.0	葉研影		花先形雲脚、全周、起		
	籠神社	京都	鎌倉		平	?	○	?		119.5	69.0	墨書		三方、平		
南北朝	智恩寺	京都	貞和2年	1346	起	-	-	○		53.2	33.6	未確認	黒漆	花先形渦文、全周、起		牡丹唐草、宝珠
	西郷寺	広島	文和3年	1354	起	-	-	○	本堂	69.1	42.7	未確認		花先形渦文、全周、起		
室町時代	白峰寺	香川	応永21年	1414	起	○	-	-	勅額門	96.4	63.6	彫刻、金箔	黒漆、金箔	雲脚、花先形全周、起		なし
	長保寺	和歌山	応永24年	1417	平	-	○	-	大門			未確認		蓮弁、全周、平		
	興隆寺	山口	文明18年	1486	?	?	○	?	法界門	108.0	62.5	彫刻、金箔		?		
	花岡八幡宮	山口	長享3年	1489	起	-	-	-		70.6	37.8	彫刻、金箔		花先形、全周、起		
	建長寺	神奈川	天文8年以前	1539	起	○	-	○	山門	400.3	378.8	彫刻、金箔	黒漆	花先形渦文、全周、起		なし
	今八幡宮	山口	天文12年	1543	平	-	○	○	樓門			彫刻		花先形渦文、全周、平		唐草浮彫、大内菱
	嚴島神社	広島	天文17年	1548	起	○	-	○	大鳥居正面	254.0	148.0	銅板、釘止め		雲形雲脚、三方、起		
	嚴島神社	広島	天文17年	1548	起	○	-	○	大鳥居背面	252.0	150.0	銅板、釘止め		雲形雲脚、三方、起		
	般若寺	奈良	室町中期		起	-	△	-	樓門か	138.2	92.4	彫刻(陽刻)		蓮弁、全周、起		
	鶴林寺	京都	応永頃か		起	○	○	-	鳥居か	104.5	82.7	銅板、釘止め		蓮弁、全周、起		宝珠、波、雲、龍
	鶴林寺	兵庫	室町	(1397)	平	-	○	-		75.0	47.5	彫刻(陰)		花先形、全周、平		
	正八幡宮	山口	室町		起	○	-	○		114.5	67.3	銅板		雲脚蓮弁、全周、起		宝珠、雲、渦巻き
	岡寺	奈良	室町		?	?	?	?	樓門			葉研影	不明	不明	不明	
江戸時代	京都御所	京都			平	-	△	-	紫宸殿			墨書		花先形、全周、平		花弁、連珠文
参考	朱雀門	奈良	平成10年	1998	平	-	△	-		265.9	206.8			花先形、全周、平		宝相華、蓮珠文

毎日新聞社『重要文化財25工芸品Ⅱ』1976に掲載されている扁額の全体高・全体幅は、その寸法を採用した。

猪目…○は猪目がハート状に穴があいているもの、△は猪目の突出部が閉じていないもの。

唐招提寺勅額の幅は復原寸法、西郷寺扁額の寸法は本堂(重文)と大きさを比較して算出した。

全体高と全体幅はセンチメートル表記。

東大寺、海竜王寺、秋篠寺、海住山寺(鉛あり)の額縁は後補のもの。

大藏寺、金剛福寺、平勝寺、興隆寺、岡寺の額縁は亡失している。

アミカケは、時代性をよく示すもの。